

カリキュラム改正により、変わる輸血/移植の教育

◎道野 淳子¹⁾、横田 綾¹⁾、二木 敏彦²⁾、松村 隆弘²⁾、清水 慶久²⁾
国立大学法人 富山大学附属病院¹⁾、学校法人北陸大学²⁾

【はじめに】臨床検査技師学校養成所に向けたカリキュラムの改正により、これまで臨床免疫学Ⅰ・Ⅱ(60時間)の中の一部であった輸血/移植に関する講義は、「輸血・移植検査学」として、専門分野内に新たに加わり、時間数にして4倍に増えた。現場での知識と経験を踏まえて教壇に立った時に見えてきた、輸血/移植教育の現状と新たなカリキュラムへの取り組み方、教育の課題について述べる。

【輸血/移植教育の現状】輸血・移植検査学はⅠとⅡに分かれており、Ⅰは必須科目として2単位(30時間)が2年次の前期、Ⅱは選択科目となり1単位(15時間)が3年次の前期に組まれている。授業計画は、Ⅰでは輸血に関する検査関連が半数を占めるほか、輸血療法、献血事業、静脈路からの成分採血、輸血副作用・合併症、白血球抗原・血小板抗原なども含めた幅広い内容となっている。一方Ⅱは、「移植」を主軸とし、移植免疫、骨髄バンク、各種造血幹細胞移植、臓器移植、拒絶反応とGVHD、再生医療、移植関連の各種検査法といった、専門性の高い内容となっている。本年度4月より輸血・移植検査学Ⅰがスタートし、15コマを2名の非常勤講師で役割分担し、進行具合を確認し合いながら授業を進めてきた。来年度から、臨床検査技師を目指す3年次に対し、輸血・移植検査学Ⅱが開始される。

【新たなカリキュラムへの取り組み方】輸血・移植検査学Ⅰで学ぶ「輸血」は、学生にとって言葉の一つ一つが初めて耳にする新しい世界である。新カリキュラムでは輸血検査の強化も求められており、現場で日常的に使用している専門用語、たとえば「抗原」「抗体」「免疫グロブリン」といった言葉に対し、丁寧な説明を加えながらの講義を心掛けた。また「ふりかえりシート」を配布し、理解できたこと、わからなかったことについて提出してもらい、添削後学生に返し、改めてその解説をすることで学生とのコミュニケーションを図った。さらに学内専用サイトの小テスト作成機能を活用し講義ごとに小テストによる復習を行った。2年次の段階での講義は学術的な知識の提供というより、「輸血」のイメージを持つことが必要と考え講義を進めた。次年、臨床検査技師を選択した学生には、「移植」を中心とした輸血・移植検査学Ⅱが予定されている。移植は、現場で経験を積んでもなお、難しい分野ではある。講義は、各種移植(造血幹細胞、臓器)(自己、同種)を知ってもらうことを第一目標とし、テキストと照らし合わせながら進めようと考えている。

【教育の課題】「輸血」に関してはある程度確立した指導要綱がある。一方「移植」に関しては、選択する教本(テキスト)により違いがあり、病院ごとの体制も様々で、標準化には至っていない。移植医療が増える中、移植関連検査に対する精度管理も、組織適合性学会が主催する組織適合性検査の精度管理参加施設は、DNAタイピング81施設、HLA抗体67施設(2022年)にとどまる。再生医療など病院では未経験の内容もあり、講義のために適切な情報収集を行う必要がある。

【最後に】カリキュラム改正の背景には、医療現場での輸血・移植のウェートが高くなりつつあることにある。このカリキュラムを経て、今後学生は臨地実習を受けそして医療機関へ就職していく。この改正となったカリキュラムを現場が知ることで、臨地実習受け入れの際の参考になれば幸いである。

連絡先 076-434-7749